

翻刻二題

——佐佐木茂索書簡・小澤碧童書簡——

東海大学大学院日本文学専攻において、二〇一一年度、近代作家の書簡の翻刻練習として、伊藤架蔵の二種類の書簡および平成六年（一九九四）五月発行『思文閣古書資料目録』第四百十号掲載の原田直次郎宛森鷗外書簡の翻刻と簡単な注釈を行った。三人の大学院生が一種類ずつを担当して翻刻素案を作成後、誤刻や注の訂正などを指導しながら授業を進めた。そのうち、架蔵二点について、伊藤が大幅に注釈を補綴したものを、ここに掲載することとした。鷗外書簡は、美術商の目録に鮮明な写真が載り、その後、何れかの御所蔵となったと思われるので採り上げない。

素案作成は、田中風弥が鷗外書簡、高能稚奈が小澤碧童書簡、高橋一平が佐佐木茂索書簡を担当した。ここに記して労をねぎらいたい。

一、佐佐木茂索書簡 久米正雄宛

解題

久米正雄は、昭和十二年（一九三七）三月十八日、イギリスの新

伊藤 一郎

国王となるジョージ六世の戴冠式の取材のため、東京日日新聞・大阪毎日新聞の特派員としてロンドンに赴いた。五月十二日の戴冠式には秩父宮が今上天皇（昭和天皇）の名代として出席したが、各新聞社の特派員はこれに随伴した。一行は、カナダを経由し東回りで英国に向かった。そのロンドンの久米宛に、日本から佐佐木茂索が出した手紙。国際郵便である。その後、久米は六月くらいまでヨーロッパに留まったようである。言うまでもなく、久米は『新思潮』からともにデビューした芥川や菊池寛の友人で、この手紙のころは、大衆小説家として著名であった。

差出人の佐佐木茂索（一八九四―一九六〇）は京都出身の小説家、のち事業家。『時事新報』の文芸欄を取り仕切った腕などを見込まれ、昭和四年（一九二九）十月、文藝春秋社に総編集長として入社した。昭和七年からは、文藝春秋社の専務取締役役に就任、経営立て直しに努力し、その結果、この書簡のころには経営状態が堅実となり、創刊十五周年記念号も出している。同副社長を経て、戦後、文藝春秋新社取締役社長となった。また、東京出版販売相

談役、東宝取締役などを務めた。

元来虚弱な体質であったようだが、大正十四年（一九二五）ころからスキー、昭和八年（一九三三）ころから登山、昭和十一年（一九三六）ころからゴルフを始め、スポーツを楽しんだようだ。この書簡で、これらスポーツのヨーロッパ製用具を久米にねだっているのは、二人の気安さからであろう。若いころ、朝鮮仁川にいた時代から久米正雄に手紙を寄せ、佐佐木はその小説批評眼を久米に認められていたという。

大正八年（一九一九）ころから、佐佐木は芥川龍之介に師事し小説家を目指した。一時期、小島政二郎・瀧井孝作・南部修太郎とともに、龍門の四天王と称されたという。横光利一・川端康成らと大正十三年（一九二四）創刊の『文藝時代』同人、大正十四年（一九二五）創刊『不同調』、昭和二年（一九二七）文藝春秋社創刊『手帖』同人となる。大正十三年には『春の外套』（金星堂、同十五年）には『天の魚』（文藝春秋）という短篇集をすでに出し、文壇の人びととも広く交際があった。三十三歳の昭和四年（一九二九）文藝春秋社の総編集長となつてからは、さらに多くのさまざまな小説家・文筆家たちと親交が結ばれたことと思われる。この書簡に名が出る人びとは、みな佐佐木茂索の知人であろう。文藝春秋社の経営立て直しを任された昭和七年（一九三二）ころから小説は書かなくなり、晩年は企業人であった。ちなみに、一九五三年（昭和二十八）のエリザベス女王の戴冠式には、佐佐木自身が参列している。その時の洋行の様子については、『ヨーロッパ片信——ローマよりロンドンまで——』（佐佐木茂索作品集〔随筆集〕

所収）に書かれている。

この当時の日本は、ナチス・ドイツとの関係を深めつつあり、日英の友好関係には蔭りが見られた。イギリスは戴冠式における秩父宮の扱いを最上席とし、日本側もイギリスとの友好関係を考慮して皇室外交を展開した。しかし、その後スイスで病氣療養を終えた秩父宮は、ドイツへも廻っている。また、同昭和十二年（一九三七）七月七日には、盧溝橋事件が勃発し、イギリスの日本に対する感情は一気に悪化した。戴冠式でも奔走した吉田茂駐イギリス大使は、ドイツへの接近の危険とイギリスとの友好を説いたが、時代は大きく日独伊三国同盟に動き、日本は枢軸国側につき第二次世界大戦へと向かうこととなった。

この書簡で話題となっているゴルフに注目すると、イギリス外遊の際にゴルフを楽しみ、ゴルフ好きで有名だった当時の今上天皇（昭和天皇）のことが連想される。その天皇は、盧溝橋事件ころより東京でのゴルフを自らに禁じたと言われている（田代靖尚氏、二〇一二）。また、戦火が迫ってくると、多くのゴルフ場が軍隊に接収され閉鎖されていくこととなる。この手紙のころは、ゴルフにとっても、ちょうどそういう時代の転換点に当たっていた。この書簡の当時、ゴルフは一部富裕層のみに許されたスポーツだった。不況と不安の世の中にも留めない、どこか庶民には無縁の金持ちの遊び、嫌な贅沢のイメージがあったことは確かであろう。昆虫採集に夢中だった自分にとっても、雑木林を雑倒し芝生と化して、維持のために殺虫剤などを撒くゴルフ場はあまり好ましい施設ではない。そういう自分のゴルフに対する非同情

的思いがあるにはあるが、久米や佐佐木にゴルフを楽しむことが自由に許されていたこの瞬間の方が、まだ遙かにまっとうで好い時代だったという思いも拭えない。『文藝春秋』昭和三十一年（九五〇）五月号掲載の川上徹太郎「戦後ゴルフの隆盛」（河上徹太郎全集 第五巻による）によると、戦争中はゴルフ「バッグを持つてホームを歩くと袋叩きにされた」という。この書簡を、のんきな手紙とだけ見るかどうか、そんなことを考えさせられた。

【翻字要領】

- ・漢字については、原簡に使用してある字体に近い字体を、新字体・旧字体より採用した。そのために、新字体と旧字体の両方が文中に出てくる場合がある。
- ・仮名の異体字はすべて現行のものに直した。
- ・原簡の仮名遣いを尊重した。基本的に旧仮名遣いで書かれているが、小文字の促音表記が一部見られる。不統一だが残した。
- ・原簡には、句読点があったりなかったりしているの、原簡にはないが句読点があった方が読みやすいところに、私に一文字分の空白を設けた。
- ・一ヶ所書き直しのために塗りつぶされた文字がある。■で表した。

翻刻

【封筒】（原簡封筒横書き）

M0, Sasaki

Masao Kume Esq.
to Mr. Shinichi Nanjo,
30, Bouverie street
London E.C.4
England

Via Liberia

【本文】

拝啓 御健康ですか。船がカナダへ近づくところから通信の紙面へ現はれるのが少くなり、そのせいか、非常に疲労してられるのぢやないかなどと考へました。いづれにせよ御氣骨の折れることと存じます。

昨日国技館へ行ったら偶然指呼の間に艶子さん昭ちゃんなど見物して居られるのを見、その帰途永井君から原稿お送り下すつた由承知しました。句會はづつと続けてゐます。四月例会では深川君と小生とが最高点でした。

草履厚う藤の垂り花見て通る

燕子や飛驒高山に二日居る

などが高点でした。

昨日河上君に面倒を見て貰つて駒沢へ出かけ二時間ほど土を掘つてみました。中々飛ばないのに腹を立て、けさも出かけてみました。御帰朝までには何とか形だけでも■れるやうにと思つてゐます。大佛君も熱心の由、秋は賑かなことでせう。

おひまがありましたら山の道具、スキーの道具よろしく願ひます。猶如上の次第故ゴルフ用品などもと慾張つてゐます。

社の方は先月第九期の決算を無事終了、相変らずの好景氣ですから御放念願ひます。

加藤三蔵 本日北海道へ出発、月末帰京の由、これから一寸會つて色々教へて貰ふつもりです。

アオバン会とやら本日我孫子である由。昨日は碧梧桐百ヶ日。御健康を飽くまで祈るのみ

五月十二日 早々不

久米正雄 様

茂索

【封筒の注】

M0,Sasaki … 佐佐木茂索。

Masao Kune Esq. … 久米正雄。[Esq.]は[esquire]の略。

手紙の宛名や公式文書で、氏名の後に普通は省略形(Esq.,Esqr.)でつける敬称。「殿」「様」の意味。

Mr.Shinichi Nanjo, … 南條は、英国在住の東京日日新聞社の

特派員の一人か。『東京日日新聞』昭和十二年(一九三七)

五月十三日朝刊三面に、「ロンドンにて(十二日)南條・

加藤・光行本社三特派員発」とある戴冠式の記事を書いた、南條であろう。日本から久米と共に随伴したのは、光行壽と松本小四郎であったから、南條はもともとロンドンにいたものと思われる。また、同朝刊二面には、久米正雄

特派員の記事も掲載されている。

30.Bouverie street … ロンドンの市街中央テムズ河沿いの地。

「E.C.4」は郵便番号。

Via Liberia … 国際郵便の船便で、西回り(インド・アフリカ経由)を指示したものとされる。リベリア(西アフリカ)経由の指示か。

使用封筒 … 使われている封筒は、文藝春秋社のもの。「BUNGEI SHUN-JU SHA」と活字でローマ字表記し、住所は「OSAKA BUILDING／UCHI SAIWAI-CHO／KOJIMACHI-KU. TOKYO」となっている。「大阪ビル 内幸町 麴町 東京」である。『文藝春秋三十五年史稿』によれば、同社は昭和二年からこのビルに移り、以後第二次世界大戦敗戦まで、大阪ビル第一号館と第二号館の中のあるこちらの部屋やフロアーを移動したという。

切手・消印 … 富士鹿二十銭切手。櫛形欧文消印「(TOKIO)／12.5.■／(NIPPON)」()内は印字が不鮮明で推定した。■部分は消えているが、一九三七年(昭和十二年)を表わす「37」が入る筈。

【本文の注】

通信 … 久米正雄は、解題に述べた通り、東京日日新聞・大阪毎日新聞(後に、両紙名を合わせて毎日新聞となる)の特派員として、英国のジョージ六世の戴冠式取材のため、ロンドンに赴いた。三月十八日の出発から、五月十二日戴冠式当日、その後のロンドン滞在などの通信が新聞に掲載さ

れた。帰国は六月になってから。同新聞記事については、『近代文学研究叢書』71掲載の久米正雄の「著作年表」（平野晶子氏作成）に、十本の記事の記載がある。久米正雄の伝記については、小谷野敦氏『久米正雄伝』を参照されたい。

国技館：『東京日日新聞』昭和十二年五月十二日十一面によれば、昨日（五月十一日）の国技館では、大相撲夏場所五日目が興行されている。佐佐木茂索は見物に出掛け、久米の妻艶子と息子昭二たちがいるのを、発見したのだろう。艶子さん昭ちゃん：久米正雄の妻と子供の昭二（昭和二年（一九二七）五月生）。

永井君：永井龍男（一九〇四—一九九〇）であろう。小説家・随筆家。昭和九年（一九三四）、久米の妻艶子の妹悦子と結婚、鎌倉に住んだ。この書簡のころは、文藝春秋社社員でもあり、久米・佐佐木とも親しかった。

句会：文壇句会のこと。永井龍男『文壇句会今昔—東門居句手帖』の「俳句余技の説」に、文壇句会のこと詳しく書かれている。昭和十二年（一九三七）二月に第一回を麴町弁慶橋さわの清水谷公園内「皆香園」で催した。中心となったのは、久米正雄と久保田万太郎で、「文筆人」十六名が参加。この手紙に関係する人物としては、佐佐木茂索、深川正一郎、永井龍男がいる。他に、小島政二郎・瀧井孝作・徳川夢聲・横光利一・吉川英治などがいた。『文藝春秋』に高点句が披露され、同十二年七月二十七日の第六回

「夢声帰朝歓迎句会」を最後に、自然消滅したという。永井龍男は、句会が途切れたのは「七月七日に勃発した盧溝橋事件の影響かとも考えられる。」「このころから世情が一変したと述べている。

この手紙で言及されているのは、四月二十七日開催の第四回。永井が同書に引く、深川正一郎の句は「楓にはみじんに花や水馬」。『文藝春秋』昭和十二年（一九三七）六月号掲載、「文壇俳句会 四月例会記」によれば、兼題の最高点が深川で、席題の方が茂索であった。ただし、兼題における深川の高点句は四点の「幅せまき障子のガラス花楓」。

深川君：深川正一郎（一九〇二—一九八七）。愛媛県宇摩郡から大正十三年（一九二四）二十二歳のとき上京し、菊池寛の書生となって文藝春秋社に入社。昭和五年に退社し、『蓄音機時報』の編集長、昭和九年三十二歳のときに、望まれて日本コロンビアに入社。昭和十年、日本コロンビアへ俳句の朗読吹込みに来た高濱虚子と出会い、以後『ホトトギス』で活躍した。昭和十二年（一九三七）秋に兵役応召するが、同十五年（一九四〇）には除隊。昭和二十年（一九四五）四十三歳で日本コロンビアを退社し、俳句一筋の生活に入る。昭和二十四年（一九四九）には『冬扇』の主筆となるも、『ホトトギス』のために終生尽力した。この書簡の時は、日本コロンビアに在職、文藝春秋社時代からの好誼（よしみ）で、文壇句会に参加したのであろう。

河上君：河上徹太郎（一九〇二—一九八〇）。評論家。ゴルフの

会の常連だった。解題でも触れた「戦後ゴルフの隆盛」(二九五六)における河上の記憶が確かなら、「文壇ゴルフの先驅は川口松太郎君であり、次は私、それに続いて久米正雄、細田民樹、加藤武雄などの諸先輩が始めた」という。

駒沢 : 駒沢ゴルフ場のこと。当時、横浜正金銀行頭取だった井上準之助によって企画された東京ゴルフ倶楽部のゴルフ場として、大正三年(一九一四)に開場された。コース設計は日本人にはまだできず、G・ブレイディとF・コルチュエスターによるもの。九ホールあった。

玉川電車が新しく開通し、交通が割合い便利だったので、駒沢の雑木林と畑ばかりの地(現・駒沢オリンピック公園付近)に造成された。創立発起人は三十名。伯爵樺山愛輔、横浜生糸合名会社取締役荒川新十郎が中心となった。横浜生糸のメンバーであった新井領一郎・村井保固や日本陶器や後に東洋陶器(現・TOTO)、伊奈製陶所(現・LIXIL)などの設立に関係する大倉和親など、銀行マンと輸出産業の花形であった陶器・生糸関連の企業人がメンバーの中心と、田代靖尚氏が「昭和天皇のゴルフ」(二〇二二)の中で詳述している。三十名の中には、成瀬正一の父、十五銀行頭取成瀬正恭が入っている。成瀬正一は、芥川や久米・菊池らとともに『新思潮』同人となったことで著名である。

この書簡の昭和十二年当時は、目蒲電鉄によって買収さ

れ、同社経営のパブリック・コース(メンバー制でないゴルフ場のこと)となっていた。

土を掘ってみました。 : : ゴルフのこと。下手くそで、クラブがボールに当たらず、「土を掘って」いるだけと、洒落たのである。パブリック・コースであるから初心者佐佐木も行けたわけである。

大佛君 : 大佛次郎(一八九七―一九七三)。小説家。福島行一氏『大佛次郎』(一九九五)によれば、昭和二年(一九二七)に『鞍馬天狗』『赤穂浪士』を発表し流行作家となり、昭和十年(一九三五)には文藝春秋社の直木賞選考委員となっていた。スポーツ好きで有名の上、昭和四年(一九二九)から鎌倉に住み、同じく鎌倉在住の久米正雄とも親しかったので、言及したのであろう。

社の方 : 文藝春秋社のことであろう。久米も佐佐木も初期のころから『文藝春秋』の同人として、菊池寛を助けてきたが、昭和七年前より、放漫な菊池社長の下で社を引締めていたのが佐佐木であったので、客員格である久米に対して、この報告をしたのであろう。『文藝春秋三十五年史稿』では、十五周年記念の昭和十二年(一九三七)新年特別号に載る阿部眞之助「人間 菊池寛」を引いて、菊池が「人々に好かれ喜ばれそうなことの一切を引受けている時、彼の不幸なる女房役は、拒絶し、突き返し、財布の口を絞めるという如き凡そ不人気となるべき役どころを全部背負い込」んでいると、佐佐木の犠牲的姿を描いていた。

加藤三蔵 … 未詳。

アオバン会 … 青蕃会。文壇のゴルフ団体。久米正雄・川口松太郎・大佛次郎・河上徹太郎・佐佐木茂索などが参加していた。ゴルフ用語のアウト・オブ・バウンズ（OB）をもじったもの。書簡の口ぶりからすると、佐佐木と久米はまだ青蕃会に参加していないような感じであるが、先記の河上徹太郎「戦後ゴルフの隆盛」（一九五六）によれば、「久米さんの主唱で今の「青蕃会」の前身が結成された」とある。ただし、「これは必ずしも文壇ゴルフファアの集りではなかった」ともある。また、『群像』昭和二十五年（一九五〇）十一月号掲載「ゴルフ談義」にも、「久米正雄老は、戦前青蕃会といふ別の文筆家中心のグループを率ゐて華やか」であつたと河上は言っている。ゴルフに興味を持ち始めたばかりの佐佐木が事情をよく知らないのか、河上の記憶が曖昧なのか、よく分からない。確かに、河上の記憶は、青蕃会が文士の集りなのかどうなのかについてもやや揺れているようである。

我孫子 … 東京ゴルフ倶楽部の熱心な会員だった浅野造船社員加藤良が責任者となり、当時の我孫子市長染谷正治の要請を受け作った我孫子カントリー倶楽部のゴルフ場。設立については、我孫子に当時別荘を持っていた朝日新聞の杉村楚人冠や講道館の嘉納治五郎が相談に与つたようである。コース設計は赤星四郎・六郎の兄弟。昭和六年（一九三二）十月に、十八ホールを完成している。関東屈指の名コース

と言われたという。この書簡の前年の昭和十一年（一九三六）には、日本アマチュア選手権が行われている。文壇人の中に誰か当倶楽部の会員がいて、青蕃会が行われたのであろう。

碧梧桐の百ヶ日 … 河東碧梧桐のこと。昭和十二（一九三七）年二月一日に亡くなった。久米正雄は、若き日に三汀と号し、碧梧桐の新傾向俳句運動で活躍したので、この知らせがあるのだろう。

参考文献一覧

【文壇・文藝春秋社関係】

河上徹太郎（一九七〇）『河上徹太郎全集』第五卷、勁草書房、一九七〇年七月二十五日。

※「戦後ゴルフの隆盛」「ゴルフ談義」所収。

川口咲子^{さきこ}編著（一九九二）『深川正一郎の世界』昭和俳句文学アルバム25、梅里書房、一九九一年三月二十五日。

『近代文学研究叢書』71（昭和女子大学近代文学研究室、一九九六年十月七日）所収「二 著作年表」（平野晶子作成）。

※昭和十二年三月十六日、三十一日、四月四日、十五日、十九日、五月八日、十日、十三日、二十二日、六月四日。

なお、『文藝春秋』昭和十二年九月号に、この特派員の関連記事が載る。

小谷野敦（二〇一一）『久米正雄伝―微苦笑の人』中央公論新社、二〇一一年五月十日。

小林祐代(二〇一)「深川正一郎展」(『虚子記念文学館報』第21号、二〇一一年四月十二日、掲載)。

佐佐木茂索(一九六七)『佐佐木茂索作品集』文藝春秋、一九六七年十二月一日。

関口安義(一九九四)『評伝 成瀬正一』日本エディタースクール出版部、一九九四年八月十八日。

永井龍男(一九七二)『文壇句会今昔―東門居句手帖』文藝春秋、一九七二年八月二十日。

福島行一(一九九五)『大佛次郎 上巻・下巻』草思社、一九九五年四月三日。

『文藝春秋三十五年史稿』文藝春秋新社、一九五九年四月八日。毎日新聞データベース「毎索」。

【ジョージ六世戴冠式関係】
吉田雪子著・長岡祥三編訳(一九九六)『ジョージ六世戴冠式と秩父宮 グローヴナー・スクエアの木の葉の囁き』新人物往来、一九九六年七月二十日。

【ゴルフ関係】
大久保房男(二〇〇〇)『文士のゴルフ―丹羽学校三十三年の歴史に沿って』展望社、二〇〇〇年十月二十四日。

久保田誠一(二〇〇四)『日本のゴルフ100年』日本経済新聞社、二〇〇四年七月一日。

撰津茂和(一九七七)『世界ゴルフ大観 日本篇 新版日本ゴルフ60年史』ベースボール・マガジン社、一九七七年五月三十日。

日。

※索引に依れば、この本の中には、久米正雄が二回、佐佐木茂索が二回登場している。久米は、藤沢カントリー倶楽部・秩父カントリー倶楽部の章で言及され、佐佐木の方は、昭和十二年(一九三七)川奈大島コースPGA(ペンマン・ゴルフ・アソシエーション)第一回大倉男爵杯競技写真に写っている。この手紙のころから、茂索がゴルフに勤しんだ様子がうかがわれる。また、昭和十七年(一九四二)スポーツ用語の邦語化が戦時対応として進められた際、佐佐木はゴルフの邦語化調査専門委員になっているという。ところで、この撰津の書、背表紙の題は「The History of Golf in Japan」で本文横書き、英国発のゴルフを論じているだけはある。

撰津茂和(一九九二)『撰津茂和コレクションI ゴルフ史話』ベースボール・マガジン社、一九九二年六月二十五日。

田代靖尚(二〇一)『昭和天皇のゴルフ』昭和史を解く意外な鍵』主婦の友社、二〇一二年十二月三十一日。

二、小澤碧童写真絵葉書 中央公論社 松下英麿宛

この葉書は、『中央公論』昭和十四年(一九三九)新年特大号に、小澤碧童(一九八一―一九四二)が「西行句抄」として七句掲載したときの通信。昭和の初めころから『中央公論』は、自由主義の立場で時局に抵抗した論陣を張っていたが、軍部の圧制により販

― 32 ―

売頒布禁止や記者の訴追にしばしばあった。昭和十二年（一九三七）七月の盧溝橋事件以後、芸術統制の魔手が伸びてくる。昭和十三年（一九三八）三月に掲載予定であった石川達三「生きてゐる兵隊」の引き起こした刑事問題で、中央公論編集長（中公部長）の雨宮庸蔵は禁固四ヶ月執行猶予三カ年の判決を受け、退社することとなった。このとき、松下英麿も編集を担当していた。昭和十四年（一九三九）には、小森田一記が中公部長となっていた。この葉書の後ではあるが、昭和十六年度（一九四一）から小森田は編集総務部長となり、中公部長の職には松下が就いている。松下が編集の中で、このころ重要な地位を占めていたことが窺われる。碧童の担当が松下であったため、前年の暮れに、碧童が問い合わせの葉書を出したものであろう。

小澤碧童は、日本橋の魚問屋の生まれ、家伝の目葉の販売もしていた。河東碧梧桐の明治三十年代半ばからの門人で、喜谷六花・大須賀乙字とともに、その当時碧門の三羽鳥と言われた。大正期、碧梧桐は自由律・ルビ俳句に向かい、その門流も、乙字は定型に留まり、自由律は荻原井泉水の『層雲』、中塚一碧楼『海紅』、風間直得『三昧』に分裂する。元米争いごとの嫌いだっただ碧童は、大正半ばから交際するようになった芥川龍之介の影響もあってか、有季定型俳句に戻って碧門諸流から離れてしまった。ところが、この葉書に出てくる昭和十四年（一九三九）新年特大号の『西行句抄』以前、昭和十二年、十三年の『中央公論』新年特大号にも碧童は俳句を載せていた。それぞれ、『近情句集』『小春行』と題する。この葉書の翌年の昭和十五年（一九四〇）新年特大

号には、掲載はない。体調が思わしくなかったであろう。同年五月十七日、日本橋横網町の同愛病院にて胃癌の手術を受けるが、手遅れのため病巣摘出をせず。翌十六年（一九四一）十一月まで生きたが、同月十七日には泉下の人となった。享年六十一歳。

なぜに『中央公論』は、新年特大号という晴れ舞台に、碧童を三年も続けて招いたのだろうか。昭和十二年（一九三七）新年特大号に碧童と共に掲載された俳人は、松根東洋城・日野草城。十三年新年特大号では、高濱虚子・白田亜浪・青木月斗・島田青峰・室積徂春・飯田蛇笏・渡邊芭・荻原井泉水・水原秋櫻子・原石鼎・村上鬼城・松根東洋城。この葉書に関係する十四年新年特大号は、高濱虚子・白田亜浪・中村草田男。いちいちこれを挙げることはしないが、ほとんどの人物が自ら俳誌を経営している古参の有力俳人であった。古顔ではあるが結社に所属しない、結社を持たない碧童が、この中に入っていることが、『中央公論』の碧童に対する破格の待遇を窺わせる。

碧童と『中央公論』との関係は、大正十五年（一九二六）九月号に、芥川龍之介の紹介で、『最中集』が掲載されて以来のものかと思われる。この葉書の受け手である松下英麿『去年の人』（一九三七）所収の「室生犀星」には、中学時代から芥川に魅せられていた英麿が、芥川の死後、中央公論の雑誌記者となったとき、芥川の後輩・友人と自然と「まず接近するという手順となったのはふしぎである」と述べている。その先輩・友人とは、下島空谷（勲）・香取秀真・久保田万太郎・久米正雄・小穴隆一・佐藤春夫・日夏耿之介・室生犀星。小澤碧童もこれらの人びとと共に挙

げられている。松下との繋がりが、碧童の晩年に華を添えることになったのだろう。なんと『中央公論』昭和十二年・十三年の新年特大号俳句欄は「発句」と銘打たれている。短歌が「短歌」欄であるのと比べても、その古風が偲ばれないか。発句という古めかしい江戸の呼称に愛着を示したのは、芥川であった。その点でも、『中央公論』は、芥川流と言えるだろう。昭和俳句の新しい担い手である草城・秋櫻子・草田男などが「発句」欄に並んでいること自体、苦笑を禁じ得ない。

『中央公論社七十年史』IV章「昭和期の『中央公論』」の「3 戦争下の抵抗から廃刊へ（昭和13・19年）」には、末の方にこの葉書の時期の文芸・中間読物類の趣向についての回顧がなされている。しかし、俳句については一顧だにされていない。いかに二十世紀が小説の天下であったかが分かる。先に翻刻解説した佐佐木茂索書簡「解題」で言及したように、昭和十二年（一九三七）の盧溝橋事件ころから戦争の影が色濃くなってきたのだから、昭和十四年（一九三九）のこの葉書のころには、俳句界も小説などと同様に戦時体制の影響下にあったに違いない。松井利彦氏『昭和俳壇史』（一九七九）、村山古郷氏『昭和俳壇史』（一九八五）などの昭和戦前期の俳句界を扱った文学史は皆これを描いている。

盧溝橋事件以後、日本軍の中国大陆への侵略戦争に拍車がかかり、戦域が拡大すると兵役につく俳人も出、また日本社会全体が同年（一九三七）秋の国民精神総動員運動によって戦争に取り込まれていった。俳句界も当然、戦場や戦争を支えた国内で、戦争に歓喜する者、賛同する者、反対する者、忌避する者、傍観する

者、すべて戦争を意識せざるを得なくなつた。つまり、「新興派、伝統派を問わず、俳人は多かれ少なかれ、戦争に関する俳句を作った」と村山古郷氏（一九八五）が述べる状況が、昭和十三年（一九三八）から十四年にかけて現出したのである。

ところで、この葉書に関係する昭和十二年から十四年の『中央公論』新年特大号「発句」欄掲載の俳句はどうだろうか。先に挙げた掲載俳人中、戦争を題材とした俳句を載せているのは、室積徂春・荻原井泉水のみである。昭和十三年に、室積は「戦勝新春譜」の題で「初日燦然うち進む無敵行軍旗」初め五句、井泉水は、上海租界での日本軍軍事行動のラジオ実況録音を聞いて、「録音上海風景」の題で「寒夜の、ああはるかより喇叭の たしかに行進してくる、空間」初め五句。どちらも歓喜組の読み振り。他の俳人たちの句は、自らの周辺の自然などを詠じた戦争とは関係のない落ち着いた俳句である。注に引くように、碧童の句も、そのような句であった。横須賀で航空母艦飛龍の進水式を拝観する句が昭和十三年（一九三八）の碧童句にあるが、「くすだまを飛び出し鳩や小春空」というのでは戦火もどこへやらである。気弱な碧童に戦争や暴力は似合わない。

〔翻字要領〕

・原稿は、割り込み記号などで込み入った紙面になっている。適宜、適当な位置に翻字を挿入した。その他の翻字要領については、佐佐木茂索書簡と同様である。

翻刻

【宛名】

市内麴町区丸の内ビルヂング五八八區
中央公論社中央公論編集部 松下英麿先生

下谷上根岸百十七 小澤碧童

【本文】

『題名 西行句抄』右句数七句ですが 先日拙句稿：去る九日頃：御送り致しましたが御受取下されましたか 何分 時日迫りをり候こと故鳥渡心配 かく御たづね申上候 十二月十八日午後四時過
和風晴 気温十二度

【宛名の注】

中央公論社 … 中央公論社は、大正十二年（一九二三）四月一日、二月に竣工したばかりの東京駅前丸ノ内ビルディング七七六区に移転したが、昭和四年七月には、さらに同ビル五階に移った。この葉書の宛先五八八区であろう。

松下英麿 …（一九〇七—一九九〇）当時の『中央公論』編集員。

編集部の中で重要な地位にあったことは、解題で述べた通りである。その文学・美術に関する感性が、戦後社会においてやや古風であった点については、目野由希氏（二〇〇三）が、露伴の史伝をめぐって論じている。

下谷上根岸百十七 … 小澤朝女氏の〈聞き書き〉（一九九五）に

よれば、昭和六年（一九三一）にそれまで同居していた母の家を出て、同敷地内に別居した家の住所に当たる。詳しくは、朝女氏の〈聞き書き〉（一九九五・二〇〇一）を参照されたい。

消印 … 荒川局の小型標語入「S型」印「貯蓄報国／荒川／

13/1218／后8・12」。着印「131219／附」（局名不明）

切手 … いわゆる第一次昭和切手の先駆けとして、昭和十二年五月十日から発行された乃木希典の肖像をデザインした葉書用二銭切手。

【本文の注】

西行句抄 … 昭和十三年（一九三八）十一月六日から十三日までの関西旅行吟中より七句抄出したもの。『碧童句集』（一九六〇）の詞書によれば、「尾啓亡主人の齒骨を京都大谷御廟に納める」ため同未亡人と京都に旅行したときの句。「五条問屋町晴鴨樓に止宿」という。「尾啓」は魚問屋の屋号。母方の従姉妹の嫁ぎ先で、高木兼五郎が主人の本名。碧童の屋号は「西徳」。両家の関係は、詳しくは「父・碧童」と思い出の人々（完結編）を参照いただきたい。次に『中央公論』昭和十四年新年特大号掲載「西行句抄」の六句を掲げる。

みかん山晴れ一筋道の温泉に通ず
山々も見え出す富士も刈田晴れ
山茶花は白一色ぞ銀閣寺

松尾 西芳寺

竹林の覆ふ林泉の苔の秋

小室 龍安寺

冬に入る照願脚下の無一塵

槇尾 中川家

門邊なる菊をしるべのうす茶かな

奈良の町

引き越しの荷に鹿のくるうす曇り

初めの二句は、汽車で京都に向かう車中の吟。また、昭和十二年新年特大号・同十三年新年特大号掲載の句も、すべて『碧童句集』に収められているので、ここでは敢えて挙げることをしない。

和風晴 気温十二度 …… このように天候・気温などを記すのが碧童の習慣。大正十四年ころ、遠藤古原草・谷口喜作などに宛て、「二日一信」と称した葉書を出していたが、それなどを見ても多くにこの記載がある。

【絵葉書写真】 …… 私製の写真絵葉書で、地藏菩薩像を後ろから写したものの。地藏像の裾の方に「大谷喜兵衛作」と署名が見える。

参考文献一覧

【小澤碧童・俳句関係】

小澤碧童（一九六〇）『小澤碧童句集』私家版、一九六〇年十一月二十日。

※小澤朝女編「年譜」を特に参照した。

小澤朝女（一九九五）『聞き書き』続 父・碧童と出の人々

—小澤朝女さんに聞く—（『湘南文学』二十九号、東海大学日本文学会、一九九五年三月二十五日、掲載）。

（二〇〇一）『聞き書き』父・碧童と出の人々（完結編）—小澤朝女さん逝く—（『湘南文学』三十五号、東海大学日本文学会、二〇〇一年三月二十五日、掲載）。

松井利彦（一九七〇）『昭和俳句の研究』桜楓社、一九七〇年二月二十日。

（一九七九）『昭和俳壇史』明治書院、一九七九年六月三十日。

村山古郷（一九八五）『昭和俳壇史』角川書店、一九八五年十月二十五日。

【中央公論社関係】

『中央公論社七十年史』中央公論社、一九五五年十一月一日。

『中央公論新社七〇年史』中央公論新社、二〇一〇年三月二十五日。

松下英麿（一九七七）『去年の人—回想の作家たち』中央公論社、一九七七年八月三十日。

目野由希（二〇〇三）『露伴「史伝」の戦中戦後—松下英麿の軌跡—』『国士館大学文学部人文学会紀要』第三十六号、二〇〇三年十二月二十五日。

（いとう・いちろう 本学教授）